

のせ通信

株式会社 能勢建築構造研究所



鳥の名前：オオタカ（若鳥），撮影場所：埼玉県，撮影日：2014年正月
撮影者：

のせ通信

二〇二四年秋 第三号

目次

- 当社の歴史について Ⅲ
- 鹿児島旅行
- のぼれる灯台マニア
- 宅録を再び始めてみたが・・・
- 釣り大好き
- 建築愛読書 【昔と今も】
- ソフトテニス
- 大豆と鶏肉のトマト煮

のぼれる灯台マニア

実は、灯台マニアです。生まれ変わったなら、灯台守になりたい、と思うくらいの灯台マニアです。正確に言うと、「のぼれる」灯台マニアです。日本には、燈光会という団体が、海上保安庁の許可を受けて解放しているのぼれる灯台が、北は秋田県の入道埼灯台から（北海道にはありません）南は沖縄県宮古島の平安名埼灯台まで、全部で十五基あります。



写真は、神奈川県三浦半島の東端に建つ観音埼灯台です。

日本最初の洋式灯台として建造されました。しかし、この煉瓦造の灯塔は大正十一年四月の地震で倒壊し、翌十二年三月にRC造として再建された灯塔も同年九月の関東大震災で被災し、現在の灯塔は三代目となります。初代の着工日である十一月一日が、灯台記念日になっています。

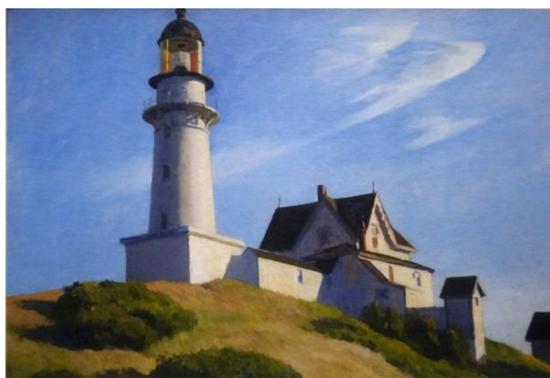
のぼれる灯台の中でも最も好きな灯台です。

小高い山の上に建っていて、全貌を写真に収めにくいのが難なのですが、灯台として正統的で簡素な美しい形をしていると思います。

観音埼灯台は、ドライブデートコース（ぼくらの頃は、デートといえば、まずドライブだったんです）の十八番でした。

観音埼京急ホテルに車を止めて（パレットパーキング！でした、今は違うけど）、海を眺めながら小洒落たフレンチのランチ（残念ながらワインはなし）をして、海沿いの遊歩道を散策した先の観音埼灯台にのぼります。展望台に出ると浦賀水道航路（東京湾の玄関口で、狭水道で潮流も早く、航海路の難所と言われています）が見渡せます。色とりどりのコンテナを積んだ貨物船が行き交います。空ではとんびが輪を描きます。

灯台についてひと纏蓄たれた後は、三浦海岸を袖に三崎口から一三四号を少し北上して三戸の海岸でひと遊び、三崎漁港でおやつ代わりのまぐろの漬け丼に舌鼓打って、橋を渡って城ヶ島、海食崖の断崖絶壁から相模湾に沈む夕日をBGMはいとしのエリーで眺めたら、横横とぼして行きつけの本牧食堂でシーフードカレー（絶品です！）、夜も更けた石川町に向けて坂道を登って行ってここがユーミンの歌で超有名な山手のドルフィンだよなんてほざきながら第三京浜目指して車を走らせます。



右上の写真は観音埼灯台のミニチュアです。かなり精巧に出来ています。よく出来ていると愛でる僕を、家族はアニメキャラの美少女フィギュアに萌えるヲタクと変わりがないと、冷たく侮蔑します。自分でも、そうかもしれないと思います。

右下の絵画は、米・ニューイングランド・メイン州のエリザベス岬に建つ灯台を描いた、エドワード・ホッパーの「トウー・ライツの灯台」です。ホッパーらしく端正で、静謐で、最も好きな画家の最も好きな作品です。一昨年（二〇一二年）のメトロポリタン美術館展で上野の東京都美術館にやって来てくれました。嬉しかった。NYに行つても見たい絵だった。この絵の前においてあった長椅子に座つて、穴のあくほど堪能しました。

左上の写真は千葉県房総半島の南端に建つ野島埼の灯台です。いつも強い風が吹いている印象があります。写真の日も強風が吹いて木が揺れています。

昔、この灯台に行つた帰りに大渋滞にはまつて裏道に逃げたら、自分達が地図上のどこに居るのか、どちらを向いているのかさえわからないくらい迷つてしまつて（勿論、カーナビなんてない頃の話です）、環形彷徨する不条理の世界に入り込んでしまつてもう帰ることは出来ないのではないかなんて目にあつた思い出があります。

左下の写真は番外です。千葉県房総半島の西端に建つ須崎灯台です。この灯台にはのぼることは出来ません。のぼれませんが高台に建つてるので眺望は素晴らしく、青く光る太平洋の向こうに伊豆大島も見渡せます。



左上の写真は千葉県房総半島の東端に建つ犬吠埼の灯台です。

ここへ行くには電車に限ります。JR銚子駅で銚子電鉄に乗り換え、赤字路線で鉄道経営では成り立たず、ぬれ煎餅の製造・販売による収益で廃線を免れている鉄道です。

犬吠埼灯台の螺旋階段は九十九里浜にちなんで九十九段となっています。また、日本の最東端は納沙布岬ですが、地軸の傾きにより、山頂・離島を除いて一番早く初日の出を拝むことが出来るそうです。

下の写真は、沖縄県読谷村に建つ残波岬の灯台です。

二〇〇六年に初めて行った沖縄の最初の目的地でした。展望台からは隆起珊瑚礁の長大な断崖絶壁から広がる東シナ海を望むことが出来ます。



ドライブデートコースのひとつだった灯台が、のぼれる灯台の冊子を手に入れたころ（のぼれる灯台に売っています）から、灯台そのものが目的になりました。何故灯台が好きなのか？ 孤高の断崖から海の安全を願って休むことなく光を放ち続ける灯台にロマンを感じるから？

いいえ、ただ単純に高いところが好きなんだと思います。灯台内部の仄暗く狭い螺旋階段を頂上まで上って外に出ると、三六〇度の大パノラマが広がります。世界の大きさに思いを馳せたり自分の小ささを思い知らされたりは、しません。ただ、開放感に浸ります。のぼれる灯台、最高です。

宅録を再び始めてみたが・・・

初めてギターを手にしたのは小6の頃、70年代フォークブームの中、5歳年上の従兄の影響でした。それ以来、楽器いじりが趣味となり、『宅録』ということやっていました。しかし、社会人になり楽器に触れる機会が減っていき、結婚・子供ができたことで、唯一の趣味から遠のいた生活を送っていました。近頃、自分の子供たちが楽器演奏をやるようになり、楽しんでいる姿に見ているうち、ぼちぼちと始めてみようか思いました。

まず、学生〜結婚するまでやっていたことを書きます。

高校に入りある程度続けければ、それなりに上達するだろうと思っていました。文化祭でバンド演奏もしましたが、と素人の域を出ず、センスが無いことを実感しました。楽器は好きだけど人前で披露するほどの腕も無いし、バンドも面倒くさく感じ、下手なりに一人マイペースに楽しみたいと考えるようになっていました。そこで自分の演奏を客観的に知るため、録音するところんな風に聞こえるのか試してみました。これが宅録の第一歩でした。1台のラジカセの内蔵マイクに向かってギターを録音、今度は再生し、一緒にギター演奏してもう一台のラジカセに録音、それを繰り返すという原始的な方法（ピンポン録音）で、音を重ねることに興味が湧いていきました。当時、レコーディングの機材はオープンリール式テープの機材が主流で、非常に高価で高校時代には買えませんでした。三十年程昔、二十歳の頃ですが十万円以下で画期的な機材『カセットテープMTR』（写真①）が普及し始め購入しました。カセットテープは承知の通りA/B面の2面あり、片面で20分の録音再生ができ両面で使えるアナログメディアですが、A/B面の区別はテープの走行方向によります。それを両面一方向で4トラックに録音再生出来るようにした機材でした。録音手順は、4トラック全てに録音するとこれ以上

入らないので、1トラックは必ず空きを作り、録音済みの3トラックを空きトラックにミックスし、3トラックを空き状態にする。これを繰り返し作成していくというもの。（これもピンポン録音）どんな楽器でやっていたかというと、ドラムセットはさすがに自宅に置けないので、ドラムマシン（写真②）を購入し、近所迷惑にならないようにスピーカーは使わずヘッドフォンでモニターしながら、エレキベース・アコースティックギター、エレキギター、キーボード、これにポーカーですが、夜中の作業が多く大きな声は出せませんでした。決して得意ではありませんし鼻歌みたいな細い歌声をおまけで重ねたりしていました。酔っ払って帰って何となく始めて、失敗してはやり直し気が付けば朝方みたいなこともありました。本当に自己満足の一言で人様に聞いていただく代物でなかったと思います。入社3年目ぐらいからは、仕事、資格の勉強でこんなことをやっている場合では無く、その後は結婚・子育てで宅録生活を完全に封印し二十五歳の歳月が流れました。

社内で皆さんがそれぞれの趣味を楽しんでいる話を聞いたり、娘と息子が、



写真① カセットテープMTR



写真② ドラムマシン

楽器を楽しんでいる姿を見て、そろそろ自分の楽しみを一つくらい持つてもいいかなと思ひ、再び楽器と宅録を始めようと思ひました。

次は、最近の話と始めたことを書きます。

三年程前から楽器演奏を再開したい気持ちはあった一方で、楽器が出来なくてもコンピューターでの音楽制作 (desktop music: 略称DTM)、いわゆる打ち込みにも興味があつてフリーソフトを使つたりしながら情報収集してました。今の時代でパソコンを使わない手はありません。自分が出来ない管弦楽器や苦手な鍵盤楽器の部分をコンピューターで補つて自分の演奏とミックスしたいと考えました。しかし、どうやって生ギターやエレクトリックギターをパソコンに取り込むか全く分かりませんでした。調べていくうちに専門的な知識が必要で一筋縄では行かないこと、専用ソフトと機材をそろえていく必要があることが分かってきました。ソフトも機材も上を見ればキリが無く入門機種とソフトを1年かけて品定めしました。デジタル・オーディオ・ワークステーション (Digital Audio Workstation: 略称DAW) という音楽制作専用のソフトを使います。このソフトは外部からの音をデジタル



写真③ DAWソフト



写真④ オーディオインターフェイス

で録音・編集・ミキシングなどの一連の作業はもちろん、様々な音源を使って打ち込みで音楽制作できるツールが装備されて

います。(写真③) 次にパソコンと楽器を繋ぐ為の機材、オーディオインターフェイスが必要です。

(写真④) USB接続でアナログからデジタルへ高音質で橋渡しをしてくれます。カセットテープで録音していた時代を思つと技術進歩は凄いと感じます。道具を揃えてセッティング完了、次にテスト。まず打ち込みでドラム＋ベース＋ピアノ＋ストリングス系シンセサイザーでとりあえず1コーラス打ち込み聞いてみました。さすがソフトで作ったものは、それなりに聞こえ満足しました。気を良くして自分の演奏でギターとベースを入れてみました。聞いてみると一定のテンポで弾けていない。元から出来ていなかったのか基本的なリズムが取れないとは情けない。昔できた短いフレーズすら弾けない指が動かない。下手なのは分かっていたがとにかく酷い。高音質だけに余計に粗が目立つ。二十五年のブランクだけの問題ではないがやはり長すぎたと感じています。道具を揃えて2か月が経ち時間も無いのでソフトも使えず楽器練習も進んでいません。『宅録やっています』と言えるには程遠い感じですが。ギターも(写真⑤)相当年季が入っていて、これを機に新調したかったです。諸事情であまり派手には出来ない状況になってきて購入は延期です。その気になって始めましたが少しトーンダウンです。しばらくは初心に立ち返ってギターの練習をほちほちやるという感じです。



写真⑤ 所有ギター

ソフトテニス

社内報作成において編集部から「コラム」と「私の趣味」というテンプレートをいただいでどちらにすべきか考えた末、趣味の域をこえて私の人生の骨格をなしているのでコラムとしました。

まず、皆さんは『ソフトテニス』と言うスポーツはご存じでしょうか、以前は軟式庭球・軟式テニスと呼んでいましたが1992年に国際普及に伴い『ソフトテニス』になりました。

私と『ソフトテニス』との出会いは、高校入学時からです。同期のものや顧問も先生とは今でもつきあっており、おおかた四十年、家族よりも付き合いが長くなっています。いまでも土曜は地元の小学校の施設開放によるコート使用でプレーして、日曜日は三木市吉川において後輩がソフトテニススクールを行っているのでお手伝いを行っています。

ソフトテニスの歴史は、1890年にやわらかいゴムボールが開発・製造されたことにより日本独自のソフトテニスが生じました。それ以来、学校を中心に普及し、120年の歴史をもつソフトテニスは現在では、約50万人を超える競技人口と700万人余と推定される愛好者のいる大衆的競技スポーツになっています。

一方、近年、国際普及への努力が実り、国際ソフトテニス連盟、アジアソフトテニス連盟などの組織が整備されて、世界の多くの国々が加盟し、国際的にも発展の道を歩んでいます。現在、韓国仁川市にてアジア大会が行われていますが（社内報が出る頃には結果がでていますが）、東アジアの国々は強豪国が多いので果たして日本は優勝出来るでしょうか。

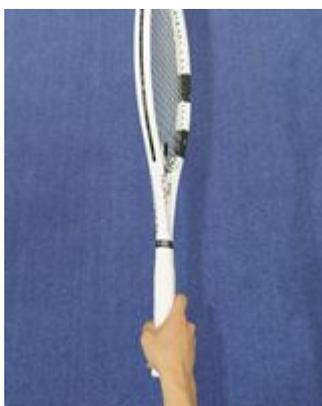
錦織君の全米での活躍で過去にも活躍された方々がいらっしやるのがわかりました。九十六年前にベスト4に入った熊谷一弥さん、九十二年前にベスト8に入った清水善造さん、全豪1回、全仏2回、全英2回ベスト4に入った佐藤次郎さん、彼らは全てソフトテニス出身のことです。また、最近では、マー君（大リーグヤンキー

スの田中将大）の奥さんである 里田まい さんも（札幌大谷02年卒、ソフトテニス部で総体北海道予選準優勝）との事です。

テニス（硬式テニス）とソフトテニス（軟式テニス）の大きな違いをご紹介します。まずは、点数の数え方です。1ゲームのなかでテニスはラブ、15、30、40と数えるのに対してソフトテニスは0、1、2、3と数えます。また、テニスは、6ゲーム先取で1セットとなるのに対してソフトテニスは（一般の大会では）4ゲーム先取で勝利となります。1セットマッチと言うことですね。その分1試合約20分程度で終わります。テニスのように数時間もプレーすることはまずありません。

次に、グリップの紹介です。

①コンチネンタルグリップ



③セミウエスタングリップ



②イースタングリップ



④ウエスタングリップ



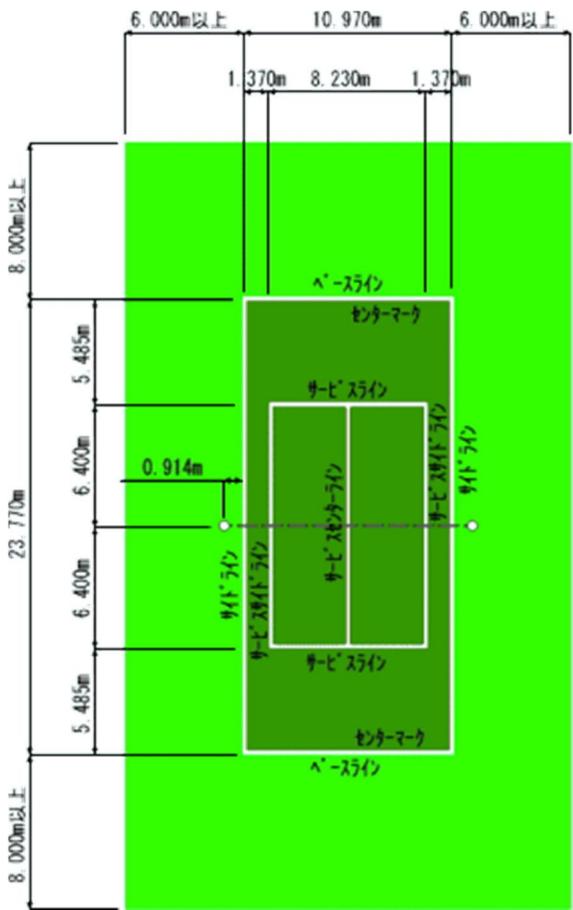
NOAH のホームページより

<http://www.noahis.com/beginner/grip/>

ソフトテニスではフォアハンドストロークもバックハンドストロークもラケットの同じ面を使う事が多く『ウエスタングリップ』がほとんどです。サービス時には『イースタングリップ』で行うこともあります。

テニスではフォアハンドストロークとバックハンドストロークはラケットの違う面を使う事が多いので『イースタングリップ』が多いようですが、この間の錦織君の対戦相手を見ているソフトテニスと同じような打ち方をしている選手が多いように感じました。より強いボールを打つとなるとラケットの面がフラットでドライブをかけやすいソフトテニスのようなウエスタングリップで行うのが適切だと思います。

次にコートのサイズを示します。(テニスもソフトテニスも共通です)



今回はこれくらいにしておきます。次回の担当回では、ルールの説明を詳しく行いたいと思います。